

【三澤勝衛先生】

三澤勝衛先生（1885～1937）は諏訪清陵高校の前身、旧制諏訪中学に18年間にわたり勤務され、その間、地理を中心に教鞭を執りながら、研究者としても活躍され、生徒・地域・学会に多大な影響を残されました。

特に太陽観測は、諏訪中赴任の翌年の1921年から左目失明の1934年末までの13年余の精密な観測で、その観測結果は、京都大学花山天文台から発行される英文会報「BULLETIN」に掲載され、毎月世界観測者に向けて報告されました。当時の長期継続観測は、世界でも希少であり、当時から世界的に注目されました。



本校における太陽観測は、先生の没後、昭和25（1950）年に三澤先生の方法を引き継ぐ形で天気象部により再開され、その後今日まで60年間にわたり継続されています。

先生の研究者、教育者としての業績は、2008年末から2009年にかけて著作集（三澤勝衛著作集 風土の発見と創造 全4巻）が発刊されたことなどから、再評価の機運が高まっています。

【三澤先生の地理学】

地理学は「風土」を対象とする学問である。「風土」とは大地の表面と大気との底面の接触面のことであり、その接触面はもはや大地でも大気でもない独立した「化合物」である。その接触面の問題を解決するためには、土壌学、植物学、動物学、農学、工学、人類学、民族学等々の資料が必要となるが、それら各方面の資料を集積しただけでは用をなさない。

そういった各専門分野の領域に属する縦の研究ではなく、むしろ横の研究が必要となる、それらが互いにあいまって接触面の性質をいっそう鮮明に表現している「一つの統一体」を通して、接触面の性質を明らかにする必要がある。そして、それこそが地理学の目的である。

【三澤先生の教育観】

由来、教育というものは、教えるのではなく学ばせるのである。その学び方を指導するのである。背負って川を渡るのではなく、手を曳いて川を渡らせるのである。

既成のものを注込むのではない。構成させるのである。否、創造させるのである。

只、他人の描いた絵を鑑賞させるだけではない。自分自身で描かせるのである。

理解の真底には体得がなければならないのである。それがその人格そのものの中に完全に融け込んで、人格化されて行くところのものでなければならないのである。

—「新地理教育論」より—

【三澤先生記念文庫】

この文庫は、ご遺族から同窓会に寄贈された先生の蔵書、論文集、資料を基本として、先生の研究精神を継承し、かつ生きた図書館として活用することを念願として、本校創立70周年にあたる昭和40（1965）年に本校校地に開設されました。その後、校舎の全面改築にともない、昭和62（1987）年、校地内に移転新築され、現在に至っています。